

米国の初等, 中等, 高等教育におけるエイジング教育  
Education about Aging at Elementary and Secondary Schools  
in the United States

仙波 由加里

(桜美林大学加齢・発達研究所, スタンフォード大学 Freeman Spogli Institute)

## 要旨

近年, 日本では高齢者人口が急速に拡大しつつあり, 学校教育においても子どもたちが高齢者との交流を通して, 高齢者への理解を深めようという取り組みがみられる. そこで本稿では米国の小学校やセカンダリースクール(中・高校)にどのようなエイジング関連のカリキュラムがあるかを概観し, さらにこうしたエイジング関連のカリキュラムのない地域では, 学校教育の中で高齢者と子どもたちがどのような交流をもち, 高齢者が教育にどのような貢献を果たしているかを考察した. それらを踏まえて, 日米間の高齢者と子どもの世代間交流への取り組みに対する姿勢の違いについて述べ, 今後の日本の小中高校に求められるエイジング教育のあり方を提示する.

米国のいくつかの州にみられるエイジングのカリキュラムには, 高齢者の現実を知ることによって子どもたちに高齢者問題を自分の将来の問題として考えさせるという意図のもと設計されていると推察される. またカリフォルニア州北部サウスベイ地域では, 小学校とセカンダリースクールのいずれにおいてもエイジングに関するカリキュラムはないが, そのような地域でも高齢者が英語の補習や科学・生物などのクラスでも教員に代わり補助的な授業を行っている例がみられた. 日本では, 世代間交流は主に子どもたち的高齢者に対する思いやり等をはぐくむ目的等で設けられているが, サウスベイ地域に関しては, 高齢者がボランティアを通して, 子どもたちの基礎学力の向上に貢献している様子が伺えた.

キーワード: 教育, 学校カリキュラム, エイジング, 高齢者ボランティア, 米国

## 1. 緒言

日本では高齢者人口が急速に拡大しつつあり, 2011年8月1日現在の総務省統計局の推計では, 65歳以上人口は2962万3000人で, 総人口に占める割合は23.2%と報告されている<sup>1)</sup>. 平成22年度版『高齢社会白書』によれば, 高齢化率は今後も上昇し続け, 2020年には29.2%, 2030年には31.8%, 2040年には36.5%, そして2055年には高齢者1人を支える生産年齢人口(15歳~64歳)は13人になるという予測も出されている<sup>2)</sup>. 平成22年国民生活基礎調査の概況をみ

ると、平成元年には14.2%であった日本総世帯に占める3世代世帯の割合は、平成22年には7.9%へとほぼ半減し、その一方で高齢者世帯の割合は、平成元年には7.8%だったのに対し、平成22年には21%へと急増している<sup>3)</sup>。この数値だけで断言はできないが、こうしたデータを見ると、日常生活の中で高齢者と若者の接点が以前よりも減少してきているのではないかと想像される。

ロバート・バトラーは、アメリカ人の多くが「老人は思考も遅く動作にもぶい」など高齢者についてマイナスの固定観念を持っており、老後に関する知識が欠落していると言うが<sup>4)</sup>、日本についても同じようなことが言えるかもしれない。高齢者人口が増加していく日本社会で、もし高齢者について負のイメージや誤解が多ければ、それは日本の将来像までも暗くしかねない。それを回避し、さらに高齢者への偏見を払拭するためにも、若者がエイジングについて正しい知識をもち、早くから自らの老後を見据えた人生設計を促すべく、幼少期から高齢者への理解をすすめる教育や高齢者政策・福祉などに興味をもたせる教育が不可欠である。

日本でも高齢者と子どもの世代間交流や子どもに対するエイジング教育の必要性については様々なところで言及されてきている。1999年6月には、文部省（現文部科学省）の管轄で「学校施設整備指針策定に関する調査研究協力者会議（主査 元日本育英会理事長 鈴木勲）」のもと、学校と高齢者施設との連携に対応する新たな学校施設の在り方に関する検討ワーキンググループ（主査 共立女子大学教授 長倉康彦）が設置された。そして全国の実態調査や現地におけるヒヤリング調査を通して高齢社会に対応する教育の在り方の検討をすすめ、その結果は『高齢者との連携を進める学校施設の整備について－世代を越えたコミュニティーの拠点づくりを目指して－』という報告書にまとめられている<sup>5)</sup>。報告書には、現在、各学校において高齢者との交流を実施しているものの、それは日常の教育活動に支障のない程度にとどまっているとあり、その内容も主に子どもと高齢者の交流を促進するための取り組みに焦点が当てられている。

また2010年度に法務省によって出された『人権教育および人権啓発施策』の中でも学校教育における高齢者・福祉に関する教育の推進に触れられており、文部科学省が学校教育の中で高齢者との交流やボランティア活動等を推進して、高齢者への理解や福祉を重要視するよう指導していると記述されている<sup>6)</sup>。

2010年には、日本学術会議が持続可能な長寿社会に資する学術政策の推進を目指して「持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティーの構築委員会」を設置し、同委員会は4回の議事を通して2011年4月に提言をまとめている。その中で、現在小学校および中学校の指導要綱に高齢者関連の内容はほとんどなく、中学校で高齢者についての討論する際の素材は「老人ホームの訪問」や「弱い高齢者像」など偏った内容であると報告されている。また高等学校については「普通科では家庭科でのみ、また看護や福祉、家庭科の専門学科でのみジェロントロジー教育的内容が扱われている」とある。小中高を通じて、こうしたエイジング教育が量的にも質的にも不十分であると指摘し、「ジェロントロジー教育を積極的に導入し、関連する取り組みを推進すべきである」と提言している<sup>7)</sup>。

では欧米社会においてはエイジング教育への取り組みはどのようになっているのだろうか。そこで本稿では、これまで米国の小学校やセカンダリースクール（日本の中学校・高校に相当し、義務教育の7年生から12年生がここで学ぶ）の授業カリキュラムの中でエイジング関連の内容がどのように扱われてきたかを概観する。さらにそうしたカリキュラムがない地域においては子どもたちがエイジングについてどのような学びの場を得ているのかを把握するために、米国カリフォルニア州北部・サウスベイ地域の事例を検討する。それらを踏まえ、今後の日本の小中高校に求められるエイジング教育のあり方を提示したい。

高齢者や高齢社会関連のカリキュラムは、通常「老年学」「ジェロントロジー」「エイジングスタディーズ」などの科目名で知られているが、本稿においてはこうしたエイジング関連の学校カリキュラムに加え、学校活動を通しての高齢者との交流も「エイジング教育」とする。

## 2. 米国の小学校およびセカンダリースクールにおけるエイジング教育

### 1) 学校カリキュラムの中でのエイジング教育

米国では1990年前後に、学校教育の中で子どもたちにエイジングについて学ばせるための具体的なカリキュラムづくりがみられるようになった。それらの実施状況は州により異なるものの、早くから取り組んでいる州として、ミシシッピ州やコネティカット州が挙げられ、その後、ニューハンプシャー州のマンチェスター<sup>8)</sup>などでも、学校教育の中で子どもにエイジングを教えようとする取り組みが進められた。

米国ではベビーブーマーは1946年から1964年の間に生まれた世代と定義されているが、この戦後生まれのベビーブーマーたちも1990年代にミドルエイジを迎えた。この世代は人口も多く、加えて平均寿命も飛躍的な伸びをみせていることから、彼らは自分たちが老後を迎えるころの社会は親世代ほど政府からの充実した経済的支援を望めないだろうと考えた<sup>9)</sup>。米国の出生数をみると、終戦直後の1946年と47年には大きく伸びをみせたが、1948年と49年には一旦その伸びは減少し、1950年代から再び上昇を続け、1961年には1年で420万人以上の子が出生した。この世代の傾向としては、初婚年齢が高く、離婚する割合も増えたため、子どもの数が減り、片親世帯が増えるなど、親世代とは異なる家族の形態が増えることとなった。そしてベビーブーマーたちは、老後は子どもたちからの支援にも限りがあるために、高齢社会に向けた対策が将来の自分たちの生活を左右すると考えたのである<sup>9)</sup>。こうした状況も影響しているのか、1990年前後には学校教育の中で子どもたちにエイジングについて学ばせるための具体的なカリキュラムづくりが見られるようになった。

エイジング教育のカリキュラムのひとつに、1990年から1992年にかけて、ミシシッピ州のDepartment of EducationとMississippi Council on Agingが、Mississippi Geriatric Education Centerや地域の高齢者関連施設等と共同で、セカンダリースクール（日本の中学校・高校に相当し、義務教育の7年生から12年生がここで学ぶ）の子どもたちのためにつくったエイジング関連のカリキュラムMississippi Curriculum on Aging for Secondary Schools<sup>10)</sup>

がある(表1参照)。作成されたカリキュラムは州の152の地方学区に送付され、選出された230名の教師、高齢者、コミュニティーのボランティア等が、このカリキュラムを保健授業の中に組み込み、1991年度に試験的に授業を実施した。授業実施後、カリキュラムづくりや授業の関係者によってワークショップが開かれ、授業に関するフィードバックが最終報告書にまとめられているが、それによれば、この授業の意義や効果を高く評価する者が多かった<sup>11)</sup>。

表1 ミシシッピーのカリキュラム

<b>Unit 1</b>	<b>Physical Aging (加齢による身体的な変化を学ぶ)</b>
Activity 1.1	子どもたち一人ひとりが高齢者と友達になり、その友達となった高齢者に年をとって身体がどのように変化し、その変化を補うために何をしているかを聞いてくる。
Activity 1.2	身体的な変化の兆候を話し合い、カテゴライズしてみる。 (肌、髪の毛、骨、筋肉)
Activity 1.3	ビデオ『The Living Body-Aging』(48分)を見せて、質問に答えさせる。
Activity 1.4	運動能力の変化を実体験させる。 例：テープで手の人差指と中指を固定した上で、黒板に書く／薬の瓶をあける／シャツのボタンをかける／靴ひもを結ぶ 等を体験。
<b>Unit 2</b>	<b>Psycho-social Aging (加齢による心理・社会的な変化)</b>
	子どもたちに、自分が50歳になったときのことを討論させ、年を重ねることにどんなイメージを持っているか(肯定的か否定的か)自分自身の考えをはっきりさせる。
<b>Unit 3</b>	<b>Demographic Aging (エイジングをデータから学ぶ)</b>
	統計資料や人口学的データからエイジングを学ぶ。(クイズ形式を使う)
<b>Unit 4</b>	<b>Economic of Retirement (老後の経済)</b>
	将来に備え、経済的な計画をたてておくことの必要性を学び、老後に備えてどのくらい貯蓄し、どのような準備をしておくことが必要かクラスで具体的に検討する。  (討論のテーマ) 車を購入する／学位をとる／定年後にリゾートで暮らす／家を買う／充実した老後を迎えるには

Mississippi Curriculum on Aging for Secondary Schools (1991) から

コネティカット州でも Department of Education と Department of Aging によって *Social Studies Classroom Activities for Secondary Schools — Schools in An Aging Society* という授業プログラムがつけられた(表2参照)。このプログラムは、高齢者が増える社会の中でも、若者たちにも高齢化社会がもたらす社会的、政治的、経済的な影響に気づかせ、高齢者のステレオタイプのイメージを取り払い、正確でバランスのとれた高齢者の実態を若者に教えることを目的とする内容構成になっており、社会科の授業の中で取り上げるようにデザインされている<sup>12)</sup>。

これら2つのエイジングのカリキュラムは、高齢になってからの身体面・精神面の変化をは

じめ、老後の生活や年金の問題、高齢者政策などを学習させるための内容が多く含まれている。

表2 コネティカットのカリキュラム

---

**エイジングに対する姿勢 (Attitudes About Aging)**

Lesson 1 年齢差別 (Ageism) : ことばと関連して (Word Association)

Lesson 2 成長することと年齢を重ねること (Growing Up and Growing Older)  
年齢差別への直面 (Confronting Ageism)

Lesson 3 時間についての考え方 (Attitudes About Time)  
誰の価値観を私たちは重んじるか (Whose Do We Value?)

**時代によって異なるエイジング (Aging in Different Times)**

Lesson 4 古代ギリシャ時代のエイジング (Aging in Ancient Greece)

Lesson 5 考え方の変化 (Changing Attitudes) : アメリカにおけるエイジング (Aging in America)

Lesson 6 労働者の高齢化 (1850-1930年)

**高齢化する人口 (Aging Populations)**

Lesson 7 世界の人口の変化 (Changing World Population)

Lesson 8 アメリカの人口の変化 (Changing United States Population)

Lesson 9 コネティカット州の人口の変化 (Changing Connecticut Population)

**文化をこえたエイジング (Aging Across Culture)**

Lesson 10 人間関係 (Personal Relationship) : 文化的な視点から (A Cultural Perspective)

Lesson 11 多文化的な意識 (Multicultural Awareness) 少数民族のエイジング (Ethnic Minority Aging)

Lesson 12 高齢者の移住 (Elder Migration) :  
祖父母たち—彼らが住むところ (Grandparents and Where They Live)

**高齢者政策 (The Politics of Aging)**

Lesson 13 健康的なエイジングを促進する法律 (Law Promoting Healthy Aging)

Lesson 14 クロード・ペッパーの最初の法案 (Claude Pepper's First Bill)

Lesson 15 町の予算会議のシミュレーション (Town Budget Meeting Simulation)  
若者 vs 高齢者 (Young Versus Old)

Lesson 16 エイジングと公的政策 (Aging and Public Policy)

Lesson 17 ニュースの中のエイジング (Aging in the News)

**エイジングの経済学 (The Economics of Aging)**

Lesson 18 高齢者への販売 (Selling to the Ages)

Lesson 19 生活費 (The Cost of Living)

Lesson 20 社会保障 (Social Security) : Q & A

**結びとして (Epilogues) —なぜエイジングを教えるか (Why Teach about Aging)**

---

Social Studies Classroom Activities for Secondary Schools — Schools in An Aging Society から

## 2) カリキュラムのない地域での取り組み—カリフォルニア州北部サウスベイ地域

著者は現在カリフォルニア州に在住しているが、カリフォルニア州は学校教育の中にエイジング関連のカリキュラムを導入していない。そこでエイジング関連のカリキュラムがない地域で、子どもたちがどのような形で高齢者について学んでいるかを知るために、著者が情報収集を行いやすいカリフォルニア州北部にあるサウスベイ地域を中心に、教育現場の関係者や高齢者、高校生からこの地域における小学校およびセカンダリースクールでの現状についての情報を収集し、その状況を考察した。

### (1) カリフォルニア州北部サウスベイ地域の概要

米国のカリフォルニア州北部サウスベイ地域とは、サンフランシスコ湾の南側に位置し、サンノゼ市を郡庁所在地とするサンタクララ郡を中心とする地域をさす。サンタクララ郡内にある市制施行された都市としてはマウンテンビュー市、サンタクララ市、パロアルト市、クパティノー市、サニーヴェール市、ロスガトス市、キャンベル市、ロスアルトス市、サラトガ市などがあり、シリコンバレーと呼ばれるハイテク産業が盛んな地域と大まかに重なっている。そのため、この地域にはコンピュータやバイオテクノロジーの専門家、研究者、開発者として成功をおさめた者も多く、教育熱心な親が多い地域でもある。毎年、米国の有名雑誌Newsweekは全米21,000校あまりの公立高校の学力ランキングを発表するが、このAmerica's Best High Schools 2010のトップ100にも、このエリアの高校5校が含まれていた<sup>13)</sup>。

サンタクララ郡の2010年の人口調査では、人口は1,781,642人であり、人種の構成は、白人35.2%、アジア系32.0%、ヒスパニックおよびラテン系26.9%、黒人2.6%、ハワイ先住民および太平洋諸島系0.4%、アメリカ先住民およびアラスカ先住民0.7%、その他4.9%（データの合計は100%にならないが、データのままとあり<sup>14)</sup>）、アジア系やヒスパニック・ラテン系の人口も多い。

### (2) 情報収集—調査協力者の抽出方法

この地域の小学校、セカンダリースクールにおいて、エイジング関連の事柄がどのように教えられているかを把握するため、2011年の3月から8月にかけて、教育関係者や現役高校生、高校卒業生、その他この地域の住人から情報を収集した。小学校のカリキュラムについては、知人を通して紹介されたパロアルト市に隣接するサンマテオ郡の小学校の校長（女性）と、サンノゼ市の公立小学校で6月まで教諭をしていた女性からインタビュー協力を得ることができた。またセカンダリースクールのカリキュラムについては、サンタクララ郡のコミュニティーネットワークに所属し、サンタクララ群の高校に通う現役の高校生やすでにこの地域の高校を卒業した子どもを持つ親たちから彼らの子どもを紹介してもらい、計12名の高校生および高校卒業生から電子メールを介して情報提供を受けた。情報提供者のプライバシー等に配慮し、本稿では彼らの名前も所属する学校名も匿名で記載する。

### (3) 小学生と高齢者との交流

インタビュー協力を得た教育者2人には、勤務している(していた)小学校ではどのようなエイジングカリキュラムが用意されているかをたずねた。そして2人ともカリフォルニア州で定められている小学校のカリキュラムにエイジングに関する内容は含まれていないと答えた。

サンマテオ郡の小学校では、実際に子どもたちの教科書をみせてもらったが、エイジングに関する内容は一切みられなかった。しかし校長によれば、学校行事の中に高齢者と交流するような催しはあり、学芸会等の催しに地元の高齢者を招いたり、感謝祭やクリスマスの前に高齢者を学校に招き、子どもたちと一緒にランチをとる催しを行っているとのことだった。

サンノゼ市のMoreland 学区にある小学校で2011年6月まで小学校教師をしていた60歳の女性も、勤務していた小学校で、学校行事として、学芸会のような行事に近所の高齢者を招いたり、祖父母の日(Grandparents Day—9月のLabor Dayの直後の日曜)を前に、子どもが高齢者に手作りギフトと手紙を書いて届けるといった行事があったと話していた。

またこの小学校では、親が仕事柄、朝早く出かけるために子どもに朝食を作ってやれない場合、バディとよばれる人の家で朝食を食べさせてもらうバディプログラム(Buddy program)があり、このプログラムでは、仕事を退職した高齢者が子どものバディになっている場合が多いということだった。

米国では入学式や卒業式に祖父母が参加するのも一般的であり、これら2つの小学校でも、そうした行事に、子どもの祖父母だけでなく、ボランティアをしている人や子どもの知り合いを含め、多くの高齢者が出席するとのことであった。

#### (4) 小学校教育に貢献する高齢者ボランティア

約140人の子どもが通うサンマテオ郡の小学校の校長によれば、この小学校には高齢のボランティアがよく訪れるとのことだった。そして特に教育的な面で大きな貢献を果たしているのが、英語の読み書きを助けるボランティアだと語った。この小学校ではスペイン語を母語とするヒスパニック系の子どもが多く、英語の読み書きが十分でない子がいるために、1日の授業終了後、スクールバスが来るまでの約30分間(3時から3時半くらいの間)、学校周辺に住むボランティアが子どもの英語の読み書きの練習を助けるために来るとのことだった。このボランティア活動には現在3名が定期的に来ていて、この3名はすべて仕事を退職した高齢者とのことだった。校長へのインタビューに行ったその日も授業が終わると、高学年の子どもが4人職員室にやってきて、教科書とは別の教材を使って、ボランティアの女性から音読の練習などをさせられていた。校長は「読み書きのボランティアの存在が、子どもの教育にも重要な役割を果たしている」と話していた。この小学校では、こうした読み書きのボランティアになるための特別な研修などは設定していないとのことだったが、ボランティアはかつて教育関係や研究職についていた人たちばかりだということだった。

この小学校で週2回、ヒスパニック系の子どもたちの英語の読み書きの補習のボランティアをしている80歳の女性に話を聞くことができた。彼女はEnvironmental Volunteer (EV) という組織でもボランティアとして自然や科学、地層、環境問題などを小学生に教える活動に参加

していると話していた。この女性がかつて大学の研究機関の研究職（生物学者）に就いていた。

EVのホームページによれば、この組織は1972年に設立され、今も100人くらいの訓練を受けたボランティアたちがサンマテオ郡やサンタクララ郡の約60の学校で、授業やフィールドトリップ（課外授業）などを通して、年間に1万2000人くらいの子どもの、9つの自然科学の分野の知識を提供しているという。ボランティアになるには、EVが定めている研修コースで、自らが担当しようとする分野のコース（一日4時間半のトレーニングを6日間受けて1コース終了）を修めなければならない<sup>15)</sup>。

この女性はボランティアになって4年目で、主に小学校を訪れ、さまざまな学年の子どもたちの前で自然に関する授業をしたり、子どもたちのフィールドトリップに同行し、訪れた地の植物や生物の生態、地形の説明などもしているとのことだった。

この女性にEVのボランティアたちの年齢層について尋ねた。米国では人に年齢を聞くことはあまりしないため実際の年齢は知らないが、退職後に始めた人が多く、大半が60代後半から70代だろうとのことだった。こうした話からもEVの活動には多くの高齢者が参加し、学校教育と密接にかかわっている様子が伺える。

サウスベイ地域には有名な大学やハイテク企業などが多く、かつてアカデミックな分野で活躍していた高齢者も少なくない。こうした高齢者の中には、子どもたちの基礎学力を培うための教育活動にボランティアとして関わっている者がいる。高い知識を持つ高齢のボランティアたちから自然科学等を学べることは、子どもたちにとってもさまざまな刺激となり、年を重ねても社会貢献する高齢者の存在を知るという面で大きな意味があるに違いない。それと同時に、高齢者にとっても、子どもたちと触れあう機会を持ち、さらにそれが社会貢献となっているのであれば、こうしたボランティア活動は高齢期をむかえた彼らの人生をより豊かにし、生活の張りや活力にもなるはずである。それは、前述の80歳の女性が語っていた「子どもから生きるエネルギーをもらっている」という言葉からも伺える。

#### (5) セカンダリースクールでのエイジング教育

この地域のセカンダリースクール（中等・高等学校）のエイジング教育の状況については、サンタクララ郡の現役高校生とこの地域の高校を卒業した若者、計12名から情報提供を受けた。彼らの在学または卒業した高校と卒業年度については表3の通りである。

彼らにセカンダリースクール在学中にエイジングや高齢者に関連する授業を受けたことがあるかをたずねたが、すべての人がそうした授業はない（なかった）と答えた。カリフォルニア州の教育委員会が定めるセカンダリースクールカリキュラムをみても、エイジング関連の内容はまったく含まれていない<sup>16)</sup>。こうしたことから、サウスベイエリアのすべてのセカンダリースクールを調査したわけではないが、この地域の学校に通うティーンエイジャーの多くは、エイジングに関連する授業は受けていないものと推察される。

情報提供してくれた若者たちの通う（通っていた）高校は総じて学力レベルが高く、大学進学率も非常に高いことで知られている学校ばかりであった。こうした高校でエイジング関連の

カリキュラムがないのは、SAT (scholastic achievement test) と呼ばれる大学進学適性試験に必要なカリキュラムやGATE (Gifted And Talented Education) とよばれる英才教育の方が優先され、エイジング教育をする余裕がないせいかもしれない。

現在パロアルト市内の公立高校に通っている男子Mは、歴史の授業の中でベテランズデー (退役軍人にたたえる日) を前に、先生が老人に感謝しようという内容にわずかにふれたことがあると言っていた。またLiving Skillという授業では、先生が「金銭の管理をしっかりと、老後に備えなさい」といったことを話したことがあるが、それも5分程度だったということであった。他には「自分の友人の中には高齢者施設にボランティアに行ったことがある人もいるが、自分自身はそうした経験はない」という者もいた。

表3 情報提供者 (サンタクララ郡の高校の在學生と卒業生)

Person ID	性別	出身・在学学校 (地域)	公立 or 私立	現役	卒業年度
A	F	L High School (San Jose)	Private		2010
B	M	L High School (San Jose)	Private	○	
C	M	V High School (San Jose)	Private		2007
D	M	H High School (Palo Alto)	Public		2009
E	M	H High School (Palo Alto)	Public	○	
F	M	H School (San Jose)	Private		2004
G	M	K High School (Cupertino)	Public		2009
H	M	H High School (Palo Alto)	Public		2010
I	M	H High School (Palo Alto)	Public		2010
J	M	P High School (Palo Alto)	Public	○	
K	F	K High School (Cupertino)	Public		2009
L	F	K High School (Cupertino)	Public	○	

### 3. 総合考察

第2章でとりあげたミシシッピ州やコネティカット州で設計されたセカンダリースクールのエイジングカリキュラムをみると、むしろ、子どもたちに高齢者への敬意や高齢者をいたわる姿勢を学ばせようという狙いもあるだろうが、自分が高齢になったときの遠い将来を見据えて、今後の生き方を考えさせる狙いもあると推察される。カリキュラムの中には、高齢になってからの身体面や精神面の変化、老後の経済的な問題や高齢化に向けての人生設計など、高齢となってからの現実についてかなり具体的なことを示すものが多く、こうした内容は高齢者理解や支援を促すにとどまらず、子どもたちに年をとっても健康で安心した暮らしが営めるよう、エイジングを学ばせようという意図があるものと考えられる。つまり子どもたちのより豊かな将来を実現するための教育も兼ねているのだろう。

またカリフォルニア州のように、エイジング関連のカリキュラムが設定されていない地域においても、さまざまな形で高齢者が子どもの教育にかかわっている状況がみられた。例えば、サウスベイ地域の小学校においては、諸事情から子どものために朝食を作ってやれない親に代わって、高齢者が自宅で子どもに朝食を提供し、一緒に食べるというバディプログラムが実施されていた。これは子どもの食育にも一役買うと推察され、また高齢者にとっては子どもの成長に貢献し、さらに食事をともしる仲間（バディ）がいるという点で日々の張り合いにもなることだろう。こうしたプログラムは子どもと高齢者の双方に利益をもたらすものと考えられる。また移民が多いサウスベイ地域では、英語を母語としない子どもも少なくなく、そうした子どもの英語の読み書きの補習や、かつては自然科学や環境問題などの専門家であった高齢者が、退職後に一定の研修を受けた後、ボランティアとしてかつての自らの専門知識を生かしながら、教師に代わって子どもたちに生物の生態や地元の地形の特徴等を教えるようなプログラムもみられた。

一方、日本の子どもが高齢者から学ぶ内容は、米国のそれとはかなり異なる。緒言で述べた日本の報告書『高齢者との連携を進める学校施設の整備について－世代を越えたコミュニティーの拠点づくりを目指して－』の第2節には、「今後の高齢社会に対応し、学校・家庭・地域社会における教育の充実を図り、子供たちに豊かな人間性をはぐくむとともに、子供たちが高齢者とふれあい、高齢者から学んでいくことの大切さが示され……（以下省略）」<sup>5)</sup>とある。この報告書の参考資料1の中で紹介されている文部省調査による「児童生徒と高齢者の交流活動の事例」には、高齢者とのふれあうために、実際に学校行事として高齢者を招いてのさまざまな催しが行われている。また高齢者から学ぶための催しとしては、授業への協力として、高齢者から戦争体験、郷土の話、昔の遊び、郷土芸能、作品制作、手芸、料理、書道、絵画、農作業などを習うといったことも行われている。こうした内容から、日本の学校教育における高齢者との交流の目的は、高齢化社会を前に、子どもたちが高齢者に対する思いやりの精神や豊かな人間性を培い、高齢者から主に日本の伝統や文化を習ったり、高齢化社会を支えていくための姿勢を学ばせようということにある。

これら日米のエイジング教育を比較すると、日本では高齢者に対する尊敬や思いやりを幼少期から育むために高齢者について学ぶことが必要であるという考え方のもと世代間交流が展開されている一方で、米国カリフォルニア州の主に小学校を中心とする事例をみると、高齢者が社会の一員として子どもたちのより実践的な学習や生活サポートにかかわり貢献するという形で世代間交流が形成されている状況がみられた。

しかし学校教育の中でエイジングのカリキュラムがないサウスベイ地域では、高校生になると授業でエイジングについて学んだり、高齢者と触れ合う機会がほとんどないこともわかった。筆者は2011年3月にサンマテオ郡にあるシニアホームを訪問したが、そのホームでは、ロスアルトス市内にある私立高校のプラスバンド部が演奏を披露しにくるというイベントが用意されていた。こうした形で高齢者との交流を経験している中学生や高校生もわずかながらいるものの、一般的には高校生が高齢者との交流する機会はそれほど多くないと推察される。

#### 4. 結語—今後の日本のエイジング教育に求められること

村上と川崎<sup>17)</sup>は、核家族が増え、高齢者と子どもの接点が失われつつある日本において、学校教育の中でエイジング教育が実施されるのがふさわしく、とりわけ若い世代にこうした機会が与えられないならば、高齢者のおかれた状況や心理に対する理解が限定的なものとなり、世代間の摩擦が強まったり、高齢者に対する根拠のない差別や偏見が助長されかねないと述べている。著者自身も彼らと同じ意見を持つが、エイジング教育は、高齢者に対する理解を促し、偏見・差別を払拭するための内容にとどまらず、米国のカリキュラムにみられるように、よりエイジングについて具体的な内容を示し、子どもたちに自分自身の将来に関連する学習としてとらえるように指導していくべきだと考える。それは将来、子どもたちに年金を納めることの必要性や、医療費や税金問題を考えることの重要性を認識させる上でも役に立つと思われる。

また近年カリフォルニア州は、州の財政難から教育予算を削る動きが顕著であり、数千人規模の教師が教育の場での職を失い、1クラスあたりの生徒数を増やし、年間の授業時間数の削減も行っている<sup>18)</sup>。こうした状況では、今後ますますエイジング関連の授業のための予算をとることはむずかしくなるであろう。しかし、その一方で、子どもたちの教育の質の維持や学力レベルの向上ためには、これから高齢者のボランティアの存在がますます欠かせない存在となっていく可能性が考えられる。

サウスベイ地域は移民が多いため、英語を母語としない子どもも多いと推測され、教師にかわって英語の勉強を手伝うボランティアの教育面での貢献は計り知れない。英語教育のボランティアは、学校だけでなく、コミュニティーの教会などで活躍しているケースもあるという。前述の80歳のボランティア女性の話では、彼女の70歳代の友人も地元の教会で、英語を母語としない若者のためにESL (English Second Language) というクラスで、10代、20代のヒスパニック系の若者に英語を教えるボランティアをしていると話していた。調査を実施したサウスベイ地域では、高校生に対してのエイジング教育はほとんど行われていなかったが、それでも語学力の劣る若者にとっては、こうした高齢者による英語教育支援は大きな助けになっているに違いない。

日本においても、効率よく、かつ質の高い教育の実現をめざして、高齢者のボランティアがもっと学校授業をサポートするような機会をもうけるべきである。そうすれば授業についていけない子どもたちへの補習などで、高齢者たちが学校教育に貢献できるようになるかもしれない。そして、高齢者の学校授業の支援では、文化や伝統を子どもたちに披露するにとどまらず、教師よりも専門的知識を持つ高齢者たちが、子どもたちの前で科学や外国語などを学習するおもしろさを語り、子どもの関心を引き出せるような授業の機会を設けるべきである。それは年を重ねても社会貢献し、人生を活発に生きている高齢者と実際に接するよい機会ともなり、高齢者に対する偏見や思い込みをあらため、高齢者に対する理解を深める上でも役に立つだろう。

## 文献

- 1) 総務省統計局：人口推計—平成23年8月報一，  
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201108.pdf> (2011.08.23) 2011年8月26日検索。
- 2) 内閣府：平成23年版高齢社会白書『平成22年度 高齢化の状況および高齢社会対策の実施状況』，  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf_index.html) (2011)，2011年10月23日検索。
- 3) 厚生労働省：平成22年国民生活基礎調査の概況，  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/> (2011)，2011年10月23日検索。
- 4) ロバート・バトラー：老後ななぜ悲劇なのか？アメリカの老人たちの生活，9頁，内菌耕二監訳，メヂカルフレンド社，東京(1991)。
- 5) 文部省大臣官房文教施設部指導課：高齢者との連携を進める学校施設の整備について—世代を越えたコミュニティの拠点づくりを目指して—，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/004/gaiyou/990701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/004/gaiyou/990701.htm) (1999)，2011年8月26日検索。
- 6) 法務省：平成22年度 人権教育及び人権啓発施策，3. 高齢者，[http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04\\_00021.html](http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00021.html) (2010)，2011年8月26日検索。
- 7) 日本学術会議 持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティの構築委員会：持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティの構築，  
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t119-1.pdf#search=> 持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティの構築 (2011)，2011年10月23日検索。
- 8) New Hampshire Seniors Count : *Teacher's Guide for Aging Sensitivity Curriculum*, Manchester Regional Area Committee on Aging, Manchester, <http://www.seniorscountnh.org/pdf/TeachersGuide.pdf>, (2007), 2011年8月26日検索。
- 9) Torres-Gil F: *The New Aging Politics and Change in America*, 138–139, Auburn House, NY, (1992)。
- 10) Thompson, R, DeBerry R: *Mississippi Curriculum on Aging for Secondary Schools*, Mississippi State Department of Education Office of Research Planning, Policy and Development, Jackson, (1991)。
- 11) Okojie, F: *Integrating Aging Content into The Mississippi Comprehensive Health Curriculum for Secondary Schools Final Report*, Mississippi State Department of Education Office of Research Planning, Policy and Development, Jackson, (1992)。
- 12) State of Connecticut, Department of Education and Department: *Social Studies Classroom Activities for Secondary Schools*, State of Connecticut, (1992)。
- 13) Anonymous: *America's Best High Schools 2010*, Newsweek, <http://www.thedailybeast.com/newsweek/feature/2010/americas-best-high-schools.html> (2010), 2011年8月26日検索
- 14) US Census Bureau : *State & County QuickFacts* Santa Clara County, California, <http://quickfacts.census.gov/qfd/states/06/06085.html> (2010), 2011年8月26日検索。
- 15) Environmental Volunteers: <http://www.evols.org/>, 2011年8月26日検索。
- 16) California State Board of Education: *Standards & Frameworks*, <http://www.cde.ca.gov/be/st/ss/index.asp>, 2011年8月26日検索。
- 17) 村上裕幸・川崎惣：「エイジング教育 (Education about Aging for Students:EAS)」の授業化へ向け  
て，鈎路論集—北海道教育大学鈎路校研究紀要，42:49–59 (2010)。
- 18) California Teachers Association: *Issues and Action — State Budget 2011–12* (2011)。

<http://www.cta.org/Issues-and-Action/School-Funding/Budget/Index.aspx>, 2011年8月26日  
検索.

## Education about Aging at Elementary and Secondary Schools in the United States

Yukari Semba

(Institute of Aging and Development, J. F. Oberlin University,  
Freeman Spogli Institute for International Studies, Stanford University)

**Keywords:** education, school curriculum, aging, elderly volunteer, the United States

In Japan, the elderly population is currently growing rapidly. For this reason, the Japanese government is attempting to promote children's interaction with elderly people to increase their understanding of aging. In order to find out what young people are taught about the elderly and what kinds of interaction occur between them and elderly people in the US, I gathered information about curricula on aging for elementary and secondary school children in several states and collected information from school staff, secondary school students, high school graduates, and elderly people involved with school education while I was working as a volunteer in the South Bay, Northern California, the US.

The curricula regarding aging that were created in the State of Mississippi and the State of Connecticut are designed on the premise that by learning about elderly people's lives and aging issues, young students will come to think of aging as an issue for their own future. In the South Bay of Northern California, there is no curriculum regarding aging at either primary or secondary schools, but elderly people are frequently involved in school education as volunteers teaching ESL, science, and biology classes, and there are also other interesting opportunities for children to interact with elderly people.